

吉田長淑の養子関係と宇田川玄真

平野 満

私はすでに「蘭方医・吉田長淑年譜考」と題して吉田長淑の伝記研究を試みたことがある。^(一)そこで若干の新しい事実を明らかにし得たつもりであるが、なお多くの不明が残された。

小稿では、前稿で明らかにできなかった長淑の養子関係と、それに伴って変化した姓について述べてみたい。また、この問題をめぐって長淑と宇田川玄真との関わりについての新事実も浮かびあがってくるはずである。

吉田長淑は安永八年、幕府の御先手井上佐太夫組同心・馬場兵右衛門信寿の三男として、江戸駒込に生まれた。母は武州崎玉郡郷土・中村幸右衛門の養女、実は吉田長肅の娘であった。

長淑は母方の祖父吉田長肅の養子となり、^(二)ハ吉田氏Vを名乗った。長淑自筆の「系図帳」に、左の如くある。

吉田長淑成徳

兵右衛門三男ニ御座候処母方苗字吉田ヲ相名乗於江戸表和蘭内科医業仕罷在候処(中略)

文政四年

吉田長淑(花押)

養父長肅は、かつて桂川家に蘭方医学を学んだといわれる。^(三)長淑が桂川甫周(月池)に入門して蘭方医学を学ぶことに

なったのも、養父の影響が大きかったと思われる。

寛政八年『蘭学者芝居見立番附』で、長淑は△吉田佐十郎▽の芸名に擬されており、同十年『蘭学者相撲見立番附』では△江戸 吉田佐公▽として東前頭三枚目の位置を占めている。^(四)長淑が桂川甫周に入門したのは遅くとも寛政六、七年と考えられるので吉田氏を名乗ったのはそれ以前のことになる。少なくとも寛政八年〜同十年には吉田姓であった。

この後、長淑は吉田から大野、倉持と姓を替え、再び吉田に復すことになる。

津山松平藩『江戸日記』△宇田川玄真▽に次の記事がある。^(五)

(一)享和二年九月廿三日

一、松平豊後守様御家来大野甫察と申者之弟佐公儀私妻之從弟御座候右之者私厄介仕度段口上願書以支配頭差出之御聞届

(二)同(享和二)年十月八日

一、先達而相願厄介仕置候大野佐公儀太田備中守殿御医師倉持宗寿と申者養子相望候ニ付差遣申度段願書差出之願之通 御許容被成候

(三)文化七年四月十日

一、先達而相願厄介仕置候大野佐公儀太田備中守殿御医師倉持宗寿方江養子ニ差遣候処此度不縁に付双方熟談の上離縁仕候段口上書以支配頭差出之

右の(一)に△松平豊後守様御家来大野甫察と申者之弟佐公儀私妻之從弟御座候▽とあるのが長淑のことである。長淑には△佐公(侯)▽の称もあった。

宇田川玄真の妻とは酒井雅楽頭家来・出淵弥惣治の娘である。玄真は玄隨の養子として宇田川家の跡を継いだ寛政十年、玄隨の門人であった江沢養寿の姉と結婚しているが、享和元年二月離縁した。そして、同じ享和元年九月に酒井雅楽

頭家来・出淵弥惣治の娘と結婚している。

『宇田川家勤書』へ宇田川玄真^(七)の記事。

一、国(寛政十年)十月朔日戸田采女正殿御家来江沢養寿と申者之姉と縁組願之通被仰付候

一、享和元辛酉二月廿九日妻存寄不相叶離縁仕候旨御聞届

一、同(享和元年)九月廿八日酒井雅楽頭殿家中出淵弥惣治と申者娘と再縁願之通被仰付候

長淑は宇田川玄真の妻(出淵弥惣治娘)の従弟であり、享和二年九月の時点でへ大野甫察と申者之弟^(八)とされている。

長淑は吉田家から松平豊後守家来であった大野家に養子として入り、大野佐公と名乗った。大野甫察の弟となったわけである。ここで、玄真のへ妻之従弟^(九)であった長淑がその縁で大野家の養子になったのか、大野家の養子になったことで玄真のへ妻之従弟^(九)という関係が生じたのか定かではないが(おそらくは後者だろう)、この願書(一)は、へ妻之従弟^(九)大野佐公(長淑のこと)を宇田川玄真のへ厄介^(一〇)としたというもので、その願いは聞き届けられた。玄真は同じ頃に、縁者の娘、妻の妹、へ妻之弟^(九)旗野太郎たちを厄介として引き取っているが、桂川甫周門人としては玄真の後輩にあたり、急速に蘭学者としての実力を示し始めた長淑は玄真にとって頼もしく鍛えがいのあるへ義弟^(九)であった。

大野甫察は寛政八年の『蘭学者芝居見立番附』でへ三味線^(一)役に擬せられる三人のうちの一人へ大野甫慶^(二)である。同十年の『蘭学者相撲見立番附』ではへ越後 大野甫察^(三)として、西前頭二九枚目に位置する。おなじ『相撲見立番附』で吉田佐公(長淑)は東前頭三枚目を占めており、蘭学者としての実力は長淑のほうがかなり上と評価されている。^(四)

大野甫察の弟になった長淑は大野佐公の名のまま、宇田川玄真のへ厄介^(一〇)として宇田川家に食客として住み込むこととなった。すでに桂川甫周(月池)の門人として蘭学を学びへ早川学之進^(五)『芝居見立番附』寛政八年)として将来を嘱望され、『相撲見立番附』(寛政十年)では東前頭三枚目の評価を得ていた長淑は玄真(『相撲見立番附』で現役最高位の東大関)に厄介として同居したことは、長淑の蘭学研究にとってこの上ない境遇となった。玄真からは蘭学について師弟の

關係を越えた懇切な指導を受けることができたと思われる。まさに、長淑は桂川甫周（月池）・宇田川玄真という最高の師から親しく蘭学を学ぶことができたのである。

先に引用しておいた『江戸日記』(二)の記事。宇田川玄真のところに厄介として身を寄せていた大野佐公（長淑）は、今度は太田備中守の医師・倉持宗寿の養子となった。享和二年十月二十八日のことである。長淑は大野に代り、倉持氏を名乗ることになった。長淑の四番目の姓である。長淑が倉持成徳直心の名前で訳出したものとして『泰西五診精要』五卷、『増補海上備用』五卷、『撥古福鳥多』一冊、『遠西薬圃綱目』一七卷が残っている。^九

『江戸日記』(三)の記事。享和二年十月、倉持家の養子となった長淑は、文化七年四月に倉持家を離縁となった。この件に関して、『宇田川家記録』^(一〇)に次の記事がある。

一、長淑事享和二年十一月太田備中守殿御医師倉持宗寿方江養子ニ差遣候 玄真弟ニ願ヒ置候事 文化六年巳秋倉持離縁之由致引取候事 同七年七月加州侯へ差出候事

長淑が倉持家の養子になるにあたって、玄真は長淑を、玄真弟ニ願ヒ置キ、玄養子ニ差遣したというのである。玄真の津山藩『江戸日記』(三)にも、玄養子ニ差遣と表現されていた。この表現は玄真が長淑を遠縁ながら妻の従弟として宇田川家の身内と意識していたことを示している。倉持家を離縁した長淑は、玄兄の玄真の元へ、玄引取られたのである。玄真が、玄兄として身元引請人になったということであろう。玄吉田氏に復した長淑は、次いで加賀藩に出仕した。

『政隣記』、文化七年七月二十七日の記事。

付札、菊地九右衛門

一、二十人扶持 吉田長淑

長淑儀御医者に被召出、如斯御扶持方被下之。江戸居住可仕候。前田式部等支配被仰付。

右之通今日申渡候条、於此表可有支配候事。

庚午七月廿七日

右藤井芳亭同流之蘭学医也。療養方は芳亭之方宜、学は長淑之方宜与云々。

右江戸より申来候に付写之、且右御覚書者前田兵部殿御渡之事。

大槻如電『新撰洋学年表』に「宇田川家譜」として載るもの。^(一三)

文化五年八月津山御供中松平加賀守殿御隠居肥前守殿御病氣に付診察御頼相成旨御国許へ申来候に付金沢へ罷越御療治仕御快方翌年宰相殿又々御不例に付再金沢に罷越云々時藤井芳亭吉田長叔^{トウキ}兩人被召出長叔^{トウキ}は義弟と致し芳亭は門人也

○前田侯には玄真を貰受けん^トと云ひしが玄真不肯乃門人藤井を薦む藩法必立合医師を要す然に藩医に蘭方医一人も無し仍て吉田を併祿せしと云ふ

冒頭に引用した長淑自筆の「系図帳」。

母方苗字ヲ相名乗於江戸表和蘭内科医業仕罷在候処文化七年七月御医者ニ被召出式十人扶持被下置江戸居住被 仰付

候(中略)

文政四年

吉田長淑(花押)

文化七年七月二十七日、長淑は藤井芳亭とともに加賀藩に出仕した。加賀藩では玄真を召出そうとしたが玄真は断り、門人の藤井芳亭を推薦した。芳亭は蘭方医であったため、藩法で定められた立合医師として長淑が出仕することになったという。江戸から加賀藩に届いた二人の人物評は「療養方は芳亭之方宜、学は長淑之方宜」というものであった。^(一三)

出仕の際、長淑は玄真の「義弟」(「宇田川家譜」)とされ、玄真から加賀藩へ「差出候」(『宇田川家記録』)とも表現されていた。やはり、ここでも玄真は長淑を「義弟」とし、加賀藩へ「差出」したのである。

すでに述べたように、玄真は享和二年に、大野佐公(長淑)を所属の津山藩にたいして正式に「厄介」とすることを

願い出て認められていた。また、長淑が大野家を離縁し倉持家に養子する際にも、津山藩に対して願書を出しており、その中で養子にハ差遣申度Vと記し、またハ玄真弟ニ願ヒ置候事V（『宇田川家記録』）とも記されていた。加賀藩出仕に際して、芳亭が玄真ハ門人Vとされたのにたいして、長淑はハ義弟Vとされるだけでハ門人Vとは記されていないが、長淑には単なる縁者としてよりもハ義弟Vとして、他の門人よりいっそう親しみのこもった敵しい指導がなされたと想像し得る。

以上、長淑の姓が馬場→吉田→大野→倉持→吉田と四度改められたこと、また長淑が養家を転々した際には玄真からハ義弟Vとして、宇田川家の一員として処遇されたことをみた。さらに、長淑は玄真のハ門人Vとは記されなかったが、実際には門人以上の待遇を以て親密な指導を受けたであろうことにも言及した。玄真は長淑の学業・生活両面にわたって、陰に陽に支え続けたのであった。

文献および注

- (一) 拙稿「蘭方医・吉田長淑年譜考」『明治大学大学院紀要』第一五集(四)文学篇、一九七七年。本稿と関わるところが多いので、合わせてお読みいただければ幸いである。
- (二) 岡崎桂一郎『我邦に於ける泰西和蘭実験内科の方祖 吉田長淑先生小伝』の口絵写真、一九二二年。
- (三) 大槻如電「駒谷吉田先生の譚」、前掲(二)所収。
- (四) 拙稿「『蘭学者見立番附』のハ吉田佐公V(吉田佐十郎)をめぐって」『明治大学大学院紀要』第一七集(四)文学篇、一九七九年。
- (五) 津山洋学資料館『津山洋学資料第一集』二七頁、岡山県津山市、一九七八年。
- (六) 前掲(五)でハ申者え弟Vとあるのは誤り。
- (七) 津山洋学資料館『津山洋学資料第一集』四頁。

(八) 岡村千曳『紅毛文化史話』口絵写真および三〇頁、創元社、東京、一九五三年。

(九) 拙稿「古方から蘭方へ―吉田長淑における蘭方内科の確立―」(『駿台史学』第四五号、一九七八年十一月)を参照のこと。
(一〇) 宇田川準一編『宇田川家記録』第一冊、武田科学振興財団杏雨書屋蔵。

なお、掛川藩の「御家中家譜抜書」に、△同(文化)七午年三月五日願ニ付隠居実方江引取Vの記事がみえるとのことである(津田進三「吉田長淑とその学統」『日本医史学雑誌』第三〇巻第二号、一二〇頁、一九八四年)。この記事によれば、長淑は掛川藩(太田備中守)へは△隠居Vを理由に実方(吉田)に復す旨、届け出たようである。

(一一) 『政隣記』金沢市立図書館蔵。(加賀藩史料)第一巻、九三九頁にも同文を載せる。

(一二) 大槻如電『新撰洋学年表』九三頁、大槻茂雄刊、東京、一九二八年。

(一三) 野村立栄の随筆『免帽降乗録』(杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』V、四九八頁、早稲田大学出版部、一九八二年所収)に次のような「江戸蘭学徒」の記事がある。

紅毛学第一 津山 宇多川玄真

(中) 略)

治療ノ方ヨシ 加賀 吉田長淑佐侯

翻訳ノ方ヨシ 同 藤井芳亭

この記事は文化十三年九月十八日、羽栗三溪(吉雄俊蔵)が江戸から長崎に帰省する途路、名古屋の小川守中(長淑門人)宅へ止宿、野村立栄たちが小川宅へ集って江戸の蘭学者の噂を聞き、それを立栄が書き留めたものである。

小川守中は長淑の蘭馨堂に学んでおり、長淑訳編『蘭薬鏡原』(文政三年刊)の巻之十二・巻之十三で校訂者に名を連ねている。この「江戸蘭学徒」の記事の末尾に立栄の覚書として△小川△初宇多川吉田△従後京都辻信濃守△従Vとあって、宇田川玄真・吉田長淑の両者に師事した人物であった。

どちらの評判も信憑性があり、両者甲乙つけがたいというべきか。

なお、△佐侯Vは、原史料の写真では△佐侯Vとなっている。△佐侯Vを書き誤ったものと思われる。

(明治大学文学部)